

「伝統」をいかに教育するかー 政治学的視点から

最終更新日：令和2年4月24日

【プロジェクト代表者】
社会科教育ユニット
准教授
谷本 純一

キーワード

・伝統 慣習 文化 ナショナリズム リスク社会 ヘゲモニー

プロジェクトの内容（目的・方法・結果と意義）

本研究の目的は、学習指導要領、特に社会科および道徳において、「伝統」が重視されていることに鑑み、公教育に学術的見地を導入するために、政治学的視点に基づく「伝統」概念を展開することにある。

本研究の方法は、伝統、文化、ナショナリズム等に関する文献・資料を分析し、これまでの研究の成果を踏まえ、伝統に関する知見をいかにして教育実践に反映させるかを分析することが主眼となった。基本的には日本語文献および英語文献の分析が中心となり、また、フィールドワークとして、ギデンズが言うところの「過去の名残り」としての史跡という点に関し、太宰府市の大宰府政庁跡および水城跡に赴き、史跡として保存されている歴史遺産というものが、現実の地域生活にほとんど結びつきを持たないという点を、史跡と市街地とのコントラストを確認することで理論と実際とを結合した。

研究の結果と意義については、以下を明らかにした。近代以前の伝統は現実生活において実質的意味を持ったが、現代の伝統は実質的意味を持たず、また近代以降の共同体の解体の中で「群衆」が発生し、彼らは過去に「手本」を求めようとするという点、さらに、伝統と歴史とは共通するようで実際には正反対のものであるということ、すなわちデヴィッド・ローウェンタールが言うように、伝統は時代に無頓着に特定の時代と結合するものであるということ、またギデンズが言うように「過去の名残り」としての史跡が、「差異の記号表現」ならば、伝統とは、他者との差異を強調するものである。ここに、一般的なものを追求すべき教育において伝統を取り上げることの矛盾が存在する。むしろ、ウィリアム・サムナーが言うように教育において必要なものは批判精神criticismであり、伝統や慣習についての教育というよりは、現代という特有の時代に適合的な共同体を探究するために、伝統の歴史の教育が必要なのではないか、ということである。

成果の応用可能性（私たちの活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。）

本研究は、単に政治学的側面のみならず、教育学及び教育実践にも応用することが可能である。

研究実践においては、伝統、文化、ナショナリズムに関する文献・資料分析が中心となったが、特に本邦においては、大学における教育学以外の研究分野と初等中等教育現場における実践とをいかに結合していくかが大きな課題であるように思われる。教科書および学習指導要領に記載されている内容は、あくまで教育の一部に過ぎない。教科書の記述の背後にどのような学術的蓄積が存在するのかという点は、たとえ児童・生徒を対象とする際には適当ではないにしても、各教員は認識しておく必要がある。

特に、教育、特に公教育の一般性というものを考える場合、デヴィッド・ローウェンタールが論じたように、前史においては伝統が人々の現実生活において実質的意味をもつものであったのに対し、現代ではそうではないということであるとすれば、伝統は一般性とは反対のものであり、公教育との間では常に齟齬が発生する可能性を秘めているということになる。それゆえに、特に教育実践の場においては、当該地域の伝統のみを扱うということでは、公教育の一般性を担保することが困難なものとならざるをえなくなるであろう。本研究において、伝統全般を扱ったことは、ともすれば個別的なものとして扱わざるをえず、それゆえ公教育との矛盾を起しかねない「伝統」概念を教育において扱う上での一定の基準を提起できたと言え、また政治学の教育実践への関与の仕方を提起できたと言える。

このプロジェクトの形成に寄与した制度等

平成31年度科研費獲得推進支援プロジェクト

プロジェクト構成員（所属・職名・氏名・役割分担）